

図書館フォーラム 議事録

1 名称

図書館フォーラム「みんなで考えませんか？10年後の図書館」

2 日時

平成30年9月8日（土）午後2時から午後4時半まで
（午後1時半開場）

3 会場

武蔵野プレイス 4階フォーラム

4 対象

図書館利用者を中心に、特に制限を設けず募集した。

なお、広報について、図書館3館での掲示、チラシ配布のほか8月15日号市報、図書館ホームページ、市ツイッター、フェイスブック等幅広い媒体にて行ったほか、当日はj-comの取材も入った。

5 来場者

40名（市内21名、市外19名）

6 内容

（竹内教育長を除き、出演者は全て図書館基本計画策定委員）

○第1部 基調講演「10年後の図書館を考える」

岡本 真 氏 アカデミック・リソース・ガイド株式会社代表取締役/プロデューサー

○第2部 パネルディスカッション

・コーディネーター

船崎 尚 氏 元武蔵野大学司書課程非常勤講師、元武蔵野市立図書館長

・パネリスト（50音順）

岡本 真 氏 同上

桂 まに子 氏 京都女子大学司書課程専任講師

北本 亜由美氏 公募市民委員

松山 巖 氏 玉川大学教育学部教育学科准教授

竹内 道 則 武蔵野市教育委員会教育長

★開会（14:00～）

【司会】

本日はお忙しいなか本フォーラムにお越しいただき誠にありがとうございます。私は武蔵野

市立中央図書館の森本と申します。よろしくお願いいたします。開会に先立ち、事務局から連絡事項をお伝えいたします。

本フォーラムでは記録のために写真を撮影し、ホームページで公開する予定です。また、ケーブルテレビの取材も入っておりますので、映像への映り込みが嫌な方はお申し出ください。撮影時に配慮させていただきます。

机の上にアンケートが2種類ありますが、A5サイズのは第2部のパネルディスカッションで紹介させていただきますので、第1部終了までにご記入いただき回収箱にご投函ください。それでは、基調講演に先立ちまして教育長よりご挨拶申し上げます。

【竹内教育長】

教育長の竹内でございます。貴重な休日の時間にお越しいただきありがとうございます。

武蔵野市の図書館は戦後間もない1946年に、市立第四小学校の教室を利用して町立図書館として設立されたのが始まりです。東京都の市町村立図書館としては戦後最初の開館で、蔵書の内容は戦災を逃れた都立四谷図書館と下谷図書館から寄託された数千冊の図書でした。その後、西部図書館、吉祥寺図書館、そして武蔵野プレイスと順次開館し、蔵書も今は90万冊を超えています。

70年間にわたり市民の皆様にご利用いただいている図書館ですが、近年図書館を取り巻く状況は様々に変化しています。今年度は図書館基本計画の改定を予定しており、今後10年間の本市の図書館の目指す方向性について現在、策定委員会で検討を進めていただいているところでございます。

今日のフォーラムは、多くの皆様に図書館に関心を持っていただき、計画の改定に向けて多様なご意見を伺う場として開催させていただきました。このような形でこれからの図書館について考える機会を設けるのは、私どもとしても初めてのことでございます。

私ものちほどパネルディスカッションに参加させていただきます。どのようなご意見が出てくるのか、楽しみと同時に緊張もしております。会場の皆様にもご参加いただき、有意義な意見交換ができることを楽しみにしております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

【司会】

それでは第1部「基調講演」を行います。基調講演は岡本真様をお願いいたします。岡本様は三鷹市にある国際基督教大学通学時代に本市図書館をご利用いただきました。同大をご卒業後に編集者等を経てヤフー株式会社でYahoo!知恵袋の開発などに関わられ、退社後2009年にアカデミック・リソース・ガイド株式会社を設立されました。「学問を生かす社会へ」をビジョンに、富山県富山市、沖縄県恩納村、福島県須賀川市等において新図書館の整備に関わられつつ、ウェブ業界を中心とした産学官連携に従事されています。

今回、改定作業を行っている本市の図書館基本計画の策定委員もお願いしているほか、全国の図書館をフィールドとして様々な形でご活躍されています。それでは岡本様、よろしくお願いいたします。

★第1部 基調講演 (14:00～)

【岡本真氏 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社代表取締役／プロデューサー)】

●自己紹介

ご紹介いただきました岡本です。

先ほども触れていただきましたとおり、国際基督教大学を20年ほど前に卒業しました。三鷹市に5～6年住んだ後、吉祥寺で5年ほど暮らしていましたので、10代から20代の10年間はほとんどこの辺で過ごしたことになります。

大学時代は日本政治思想史を勉強しました。その後、出版社を経てYahooに移り、10年間インターネットのサービスに関わる仕事をしてきました。そして10年ほど前に自分の会社をつくり現在に至ります。

今は、図書館をつくる仕事をしています。一口に図書館をつくると言っても新設する場合、あるいは、既にある図書館をこれからどのように使っていくか、時代の変化に合わせて中身をどのように変えていくか検討をするなど、様々です。

●10年後を見据えた検討

さて、本題に入りましょう。

いま武蔵野市では武蔵野市図書館基本計画の策定を進めています。前の計画が出来てそろそろ10年経つので、次の10カ年を見据えた計画をつくっていこうとしているのです。このことに私はかなり驚き、さすが武蔵野市だと思いました。というのは、こういった計画をきちんとつくっている自治体はそれほど多くないからです。大概の自治体は図書館を建てる時にしか計画を作らない。建てた後に図書館をどのように運営していくかは深く考えていないケースが多いんです。市民の方には、これは本当に良いことだと思っていただければと思います。

一方で、10年後、2028年を予測するのはなかなか難しいことです。

10年前を振り返ってみると、どれくらいの時間のスパンなのかが少しわかると思います。10年前といえば、橋下徹弁護士が大阪府知事になり、そして忘れがたい秋葉原の通り魔殺傷事件が起きました。中国の四川大地震、そして東日本大震災の前兆だったのではないとも言われる岩手宮城内陸地震が発生し、オバマさんが大統領選に勝ったことで、新しい時代が来るという認識が広がった年でもありました。

そこからこの10年間に多くのことがありましたが、2008年の段階で3年後に東日本大震災が、そして熊本地震や今回の北海道地震が起きると予測できた人は、それほど多くはなかっただろうと思います。

ただ、計画をたてるには、2018年のいま、10年後の社会がどうなっているのかを考えなくてはいけない。本当に難しいです。

まず、人口が減る。これだけは間違いない。一方で寿命は延びると言われています。いま確かに言えるのはその2つぐらいではないかと思います。今は想像もつかないが、「なるほどこういうふうになったか」と思うような10年後がやって来るであろうと思います。

●武蔵野市の図書館基本計画の検討

今年の初めに新しい図書館基本計画の策定委員会が組織され、公募で入られた市民の方も含め9人の委員で、武蔵野市の図書館として何を目指していくべきか議論しています。

関心のある方はぜひ傍聴にいらしてください。ここにお集まりの方は恐らく武蔵野市の図書館に強い関心をお持ちだと思うので、ぜひ時間をつくって顔を出していただければと思います。

行政は周知のための努力をすごくしていて、市民の皆さんの知らないところで勝手に何かを決めることは決してありません。ほとんどの会議は公開されていて、何が語られているかわかります。こういったことを意識していないと、「知らないうちにこんなことになっていた」ということになってしまいます。

図書館基本計画策定委員会は毎月開催していますが、これも普通ではないです。通常はもっと間を開けて開催します。検討経過をまとめて原則に則ってきちんと情報公開するだけでも、二ヶ月に一度でもかなり大変なことです。

ただ、毎月やっているおかげで、他の委員の方がどのようなことをお考えなのか、市民委員の方が市民として日々何を感じられているか、聞くことができ有難いと思っています。

計画については、まだ確定ではなく検討中のものですが、現時点での基本方針として、図書館そのものの力をもっと高めていく、また、そうやって高めた図書館の力を地域社会に生きる皆さんに活かしてもらおう、といったことが挙げられています。

武蔵野市には中央図書館、全国的にも有名な武蔵野プレイス、先般リニューアルオープンした吉祥寺図書館の3つの図書館があります。市民規模からも自治体規模からも、市内に3つの図書館が整備されているというのはあまりなく、手厚い図書館政策がなされていると言っていざらうと思います。

●検討内容について：デジタルの活用

これからは、デジタルやウェブの技術を活用する図書館となっていくことが非常に重要と考えていますし、今回の基本計画の中でもその方向で議論が進められています。

いま図書館では本に IC タグというものがついていて自動貸出などができるようになっていますが、タグを機械にかざして読み取るというのは、すでに前時代的すぎるような気がしています。

例えばスマホをかざすだけで貸し出すことは、もう技術的には決して難しいことではありません。スマートフォンは所有者情報と紐付いて登録されているので、わざわざ本人確認する必要もないわけで、そうすると今のような利用者登録カードも不要になるかもしれません。こういった新しい技術に対応したサービスのあり方も、貪欲に追求していくことが必要ではないかと思っています。

●検討内容について：地域課題解決

図書館といえば「本を貸し借りする場」という印象が強くあると思います。それはもちろん間違ったことではありません。経済的な条件などに関係なく、誰もが資料を手にとって読むことは非常に重要なことですし、これからもずっと維持されるべきことです。同時に、実際にこの武蔵野プレイスがそういう図書館として機能しているように、皆さんが仕事をしたり家庭

生活を送ったりしていく上で様々な課題に直面したときに、それらの課題をきちんと発見し、解決策を見出していく、それらをきちんとお手伝いできる図書館であってほしいとも思っています。

これは、図書館基本計画の中に具体的な計画・目標として議論されていく必要がある点だと思いますので、本日も全委員が来ていますし、本フォーラムはまさに議論をするための場ですから、後半にぜひ市民の皆さんから率直な声を聞かせていただければと思っています。

参考までに伺いますが、武蔵野市民の方はどれくらいいらっしゃいますか？（挙手）

やはり市民の方が多そうですね。近隣自治体の方は？（挙手）

三鷹や調布の方も多そうですね。市民の立場であれ市外からの利用者という立場であれ、武蔵野市の図書館はこれからどうあるべきか、ぜひ声を伺えればと思います。そういったご意見を十分に踏まえながら委員会で議論をし、市民の皆様の声を伺って近い将来この武蔵野市図書館基本計画が策定されることで、必要な予算や人員の配置が行われて、図書館行政が継続されていくこととなります。

●全国の図書館の動向

日常的に身近な図書館を使っているけど、図書館の全国的な動向はどうなっているのかは、なかなかわからないと思いますので、少しお話したいと思います。

今、図書館の潮流は、大きく3つにまとめられます。

○動向1：図書館の新築ラッシュ／ブーム化

ひとつは新築ラッシュです。実はいま、図書館新設が空前のブームになっていると言ってもいい状況です。近隣では中野区が建て替え中ですし、昭島市にも新図書館が出来るはずですよ。西東京市も検討が続いていますが建て替えることは間違いない。また都立多摩図書館も建て替えが終了しました。

弊社調べでは、全国約1,700の自治体のうち約300の自治体で図書館を新設（改築）する計画があります。ちなみに全国の公共図書館の数は3,200館です。ということは、公共図書館全体の10分の1ぐらいが置き換わっていくということになります。

その理由のひとつは、建物が古くなっていることです。多くの図書館は1970～80年代に整備されたので、築30～40年を経過して建築物として危険になっています。日本全国で大地震発生の可能性が極めて高い中で、中途半端な公共建築をそのままにしておくわけにはいきません。

○動向2：図書館のまちづくり拠点化（政策）

しかし、図書館増加の理由はそれだけではありません。図書館はまちづくりにおいて非常に重要な場所であるという認識が広がってきていることも大きな要因です。これには、武蔵野プレイスの存在が、全国にかなり大きなインパクトを与えたのは間違いありません。

地方都市で起きている典型的な問題は、大型ショッピングセンターがどんどん撤退することです。その理由は人口が減っているからです。そして物を買う場所が無くなるとまた人口が減少し、本当に消滅の危機にある自治体が出てきています。

その中で、行政としては、もっと人がまちなかに出てきて集い交流するような場所をつくりたい。それはかつてはショッピングセンターでしたが、いまは図書館です。図書館が持つ圧倒的な集客力がようやく認識されるようになってきたのです。

図書館に人が来る理由は、まず無料であること。これは非常に大きな要因です。図書館無料は図書館法という法律によって定められており、各自治体が勝手に有料にすることはできません。

私は、図書館が無料の理由は、経済的な格差に関係なく人は知りたいことを知る必要があるから、と理解しています。“知る権利”という言葉がありますが、知りたいことを知ることができる社会であることがすなわち民主的な社会であり、社会の健全性、社会の成長性、発展性に大きく影響すると考えます。我が国の場合は特に、歴史的に情報統制がなされてきたことへの深い反省があり、今日のような開かれた図書館の仕組みが設けられているわけです。

法律によって無料が定められているのですから、図書館の事業そのものは当然ながら大赤字になります。でも、その結果ここに人が集い、周辺にも人が集まってくる効果が期待できます。例えば武蔵野プレイスに人が来れば、帰りはイトーヨーカ堂や駅北側の商店街に寄って帰るかもしれない。つまり、そこに人が集まることによって地域に消費活動が生まれて地域全体が活性化します。図書館がその集客能力を担うわけです。

また、図書館で本を借りると、大半の人は貸出期間を守って2週間後に再びやってきます。これは、商業施設で考えればすごいことで、月に2回来店してもらうのは実はとても大変なことなのです。つまり、図書館は常にリピーターを獲得できる。これも、図書館をまちづくりの拠点にする大きな理由のひとつとっていいでしょう。

○動向3：背景にある持続可能な自治体経営論

武蔵野市は財政的に健全な自治体ですが、多くの自治体はお金がありません。小学校にエアコンを入れることもできないくらいです。

そこで今意識されているのは持続可能な形での自治体経営であり図書館づくりです。大規模な投資をし過ぎず、図書館そのもので収益を上げることはできなくても、周辺に様々な商業的な仕掛けをつくることによって、図書館建設のための投下資本を間接的に回収していこうとするものです。

今後は、今までと同じ感覚で公共施設をつくり、運営して市民の利用に供することは現実的には不可能です。すべての自治体は総務省の指示により、自治体内にある全ての公共施設を洗い出し、今後どのようにそれらを使っていくのか、お金がなくてすべての施設を保っていくことが難しいならどの施設を削減していくのか、具体的に検討した「公共施設等総合管理計画」を策定しています。これを見ると、地方の自治体では、8館ある図書館を6館に減らして2年後には1館にするなど、すごいことになっています。でも、人口減少社会においてこれは抗いようのない現実で、そうなるとう当然ながら、その時のお財布の実状に合わせた施設の整備と管理をしていく必要が出てきます。

実際に地方自治体でどのような取り組みが行われているのか、象徴的な事例を2つご紹介して終わりにしたいと思います。

○事例1：福島県須賀川市（複合・機能融合）

私自身が関わっているケースで、福島県須賀川市の事例をお話しします。須賀川市は福島県の中程にあり、あまり知られていませんが、東日本大震災で揺れ被災が一番厳しかった地域です。市役所や体育館、福祉センターなど公共施設のほぼ全てが壊れて、私も現場を見た時にはよく死者が出なかったものだとぞっとしました。

いま、それらの壊れた施設を全部集約して、図書館を核とした「市民交流センター」という大きな施設をつくっています。計画にあたっては武蔵野プレイスも視察して参考にしています。

この施設の大きな特徴は、図書館、公民館、FM コミュニティラジオ、子育て支援センター、ホールなどの様々な施設がひとつの建物に入っていますが、それらが別々にあるのではなく、融合していることです。どのフロアが図書館などとは決まっていなくて、全フロアが図書館機能を持ち、全フロアが公民館機能を持つという具合です。ですから、例えばダンススタジオの周辺にはダンスやパフォーミングアートに関する本が、音楽スタジオの周辺には楽譜など音楽の本が置かれています。管理が大変になるのは目に見えていますが、どの場所も図書館であり、公民館であり、子育て支援センターでありという施設なのです。来年1月11日にオープンしますので、機会がありましたらぜひ行ってみてください。ちなみに、ここはウルトラマンやゴジラをつくった円谷さんの出身地で、この施設内に円谷さんのミュージアムもこの中に入ります。市内のいたる所にウルトラマンの像が立っていて、特に50代以上の方には楽しんでいただけたと思います。

○事例2：和歌山県紀の川市（図書館統廃合）

比較的ポジティブなケースである須賀川市に対して、現実的なケースとして取り上げるのが和歌山県紀の川市です。『紀ノ川』という有吉佐和子さんの有名な小説がありますが、その紀ノ川が東西を貫いて流れている地域です。

ここは5つの町の合併によってできた市ですが、各町が持っていた5つの図書館のうち3つを廃止して、紀の川を挟んで北部と南部に1館ずつの2館に集約しました。集約と言っても新しい図書館を建てるのではなく、従来からある図書館を一部拡張したり、従来の役場の庁舎を改装して図書館に転用したりする形です。

今後は、合併した市町村を中心に、こういった施設統廃合で数を減らす例が増えて来ると思われます。平成の大合併から大体10年が経過し、人口が減少して財政的に保たない自治体では、同一機能の統廃合で一気に減らすケースが増えてくると思います。私が知っているだけでも5自治体ぐらいでこういう話があり、地域によっては地域住民の熱い反対運動が起きています。しかし、冷静に考えなくてはいけないのは、もはやただ反対すれば何とかなる時代ではないという現実です。市民の皆さんが強く望むなら図書館を残すことはあり得ますが、その結果として自治体が財政破綻して夕張に続くことになってよいのですか、ということです。

ですから、市民のみなさんはぜひ賢くなって、自治体の計画書や予算書をきちんと読み込むことをお勧めします。その中で、このお金をもっと賢く使ったらどうか、こういうことができるのではないかと、といったことを提言していくことが、今後の市民には求められるのではないかと思います。

●これからの図書館

最後に、これからの図書館について少し述べたいと思います。

資料にありますように、図書館の役割について、資料の収集、整理、提供、保存はこれまでもなされてきたことであり今後とも重要なものですが、これからの時代の図書館にはさらに二つ、大事なことがあります。

ひとつは、まさに武蔵野プレイスが実現しているように市民同士の交流の場であること。

そしてもうひとつは、そういった市民の交流と図書館らしい資料があることよって、様々な創造的な活動が行われること。

この2点をきちんと延ばしていくのがこれからの図書館のあり方ではないかと思っています。

これからの武蔵野市の図書館のあり方を考える上でも、こういった考え方を参考にさせていただければと思います。以上です。

【司会】

ありがとうございました。では、以上をもちまして第1部の基調講演を終了いたします。

★第2部 パネルディスカッション（15:00～）

【司会】

第2部のパネルディスカッションに先立ち、事前にお配りした資料に訂正がありますのでお伝えします。「武蔵野市の図書館」の8ページのスライド「同規模自治体図書館との比較」の右上の「資料費」「貸出数」の表題が入れ替わっておりますので、修正をお願いいたします。

それではパネルディスカッションを開始いたします。コーディネーターは図書館基本計画策定委員会の船崎尚委員長です。よろしくおねがいします。

【船崎】

船崎です。よろしくお願いいたします。私は昭和62年10月から平成15年3月まで武蔵野市の図書館に勤務しておりました。その前の15～16年間は民間におりまして、図書館を利用するほうの立場でございました。

その後、図書館に入りましたが、それからもう15～16年経ちます。これからご紹介する今日のパネリストの皆さんは、それぞれ図書館学のご専門だったり図書館に非常に興味を持っている市民だったり、外から図書館を見て意見を提案していただけるような方だったり、私としてもお話を楽しみにしております。

コーディネーターという仕事は不慣れなので行き届かないところもあるかと思いますが、どうかご寛容のほどよろしくお願いいたします。それでは早速、自己紹介も兼ねて本日のパネリストより一言ずつお願いいたします。

まず私の隣から、玉川大学教育学部教育学科准教授の松山巖さんです。

【松山】

皆さんこんにちは、松山と申します。武蔵野市に引っ越してきて24年になります。今は大学

で図書館情報学を担当し、司書資格を取りたい学生を相手に日々授業をしております。

先ほども新しい図書館のお話がありましたが、小学2年のとき、初めて図書館が近所にできました。それ以来足繁く通って図書館というのは色々な面で頼りになるどころ、使えるところだな、ということを知り、それが今の仕事の原点になっているような気がします。

今日はどこまで話に加われるか自信はありませんが、地元に住んでいて図書館に関わる仕事をしている者として少しでもお役に立てればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【船崎】

ありがとうございました。続いて、京都女子大学司書課程専任講師の桂まに子さんです。

【桂】

桂と申します。本日は京都からまいりました。私の武蔵野市とのご縁は大学院時代に遡りまして、修士論文のテーマおよびフィールドワークの対象として三多摩地域を選んだことにあります。そのご縁で今回の基本計画策定委員会にお声掛けいただきましたが、実は10年前の基本計画にも若輩ながら加わっておりました。

図書館情報学研究の立場から感じているのは、武蔵野市の図書館は非常に評価できる、そして歴史的にもとても重要な存在であるということです。ここは10年後を考える場ですが、私が10年前から関わってきて今感じていること、その中でとても大事だと感じていること、今日はそこに焦点を絞ってお話できればと思っております。よろしくお願いいたします。

【船崎】

ありがとうございました。続きまして第8期図書館運営委員会の委員で市民公募委員の北本亜由美さんです。

【北本】

公募委員の北本と申します。図書館がご専門の方ばかりのなかで、私だけが唯一の素人で、もし、今日の会場で図書館について専門知識がない方がいらしたら、全く同じ感覚でこちら側に座らせていただいています。そのため、知識のある方からすれば「そんなことはわかっているだろう」というような質問をしてしまうかもしれませんが、一般的な目から見てもどうなんだろう？ということ、一市民の意見として言えればと思いつつ委員をやらせていただいています。今日もそういう気持ちで参加しておりますので、皆さんよろしくお願いいたします。

【船崎】

ありがとうございました。続きまして第1部で講演いただいた岡本真さんです。

【岡本】

よろしくお願いいたします。

【船崎】

最後になりましたが、武蔵野市教育委員会の竹内教育長です。

【竹内】

教育長の竹内です。どうぞよろしくお願いいたします。

【船崎】

ありがとうございます。それでは早速本題に入りたいと思います。

まず、今回改訂中の図書館基本計画の大きな目標となっている「図書館の将来像」について、パネリストからお話いただきたいと思います。10年後にはどんな図書館になっているのか、あるいはどんな図書館になることが望ましいのか、どんな図書館にならなければならないのか、むしろ変わらないほうがいいのか、そういったことも含めてお話しいただければと思います。

最初に教育長から、問題提起も兼ねてお願いできますか。

【竹内】

では最初に、資料をもとに図書館行政についてご説明します。市内には中央図書館、吉祥寺図書館、そしてここ武蔵野プレイスの3館があります。武蔵野市の場合、公共施設は“三層構造”とあって、市内に1つというレベル、吉祥寺駅・三鷹駅・武蔵境駅それぞれの駅勢圏に1つという駅勢圏のレベル、それからコミュニティレベルで1つずつというレベル、この3つの考え方があり、図書館については駅勢圏ごとに1つずつという位置づけにあります。

次に図書館行政の沿革ですが、昭和21年8月の町立図書館の誕生から吉祥寺図書館がリニューアルされた今年4月まで、西部図書館が武蔵野プレイスに置き換わったり、小学3年生の「読書の動機づけ指導」を開始したり、あるいは朗読奉仕の会の発足などもあり、現在に至っています。

3館の比較ですが、開館時間にご注目ください。中央図書館は現在は土日祝日が午後5時まで、吉祥寺図書館はリニューアル後は土日祝日含めて午後8時まで、武蔵野プレイスは午後10時までとなっています。

蔵書数は中央図書館64万冊、吉祥寺図書館9万3,000冊、武蔵野プレイス17万7,000冊で、ここに数字は出ていませんが貸出数は直近のデータでは中央図書館が87万冊、吉祥寺図書館が26万冊、そして武蔵野プレイスが106万冊で、貸出冊数が蔵書数を大きく上回っており、中央図書館から武蔵野プレイスに本を動かして貸出に応じています。

蔵書冊数は全体では約91万冊です。中央図書館地下の閉架の書庫を集密化して置く場所を増やしてきました。まだ余裕がありますが、約100万冊が上限かと見込んでいます。毎年、約4万冊を新しく買っている一方で、今は廃棄（年間除籍冊数）は少なめですが、今後は書庫の上限100万冊を踏まえて、買い入れ冊数と除籍が拮抗してくるのではないかと思います。

次に利用者の状況です。市内と市外の利用者数が拮抗してしまっていて、これは周辺自治体ではあまり例がないと思います。市民の登録率は直近で大体3割弱。で、まだまだ伸ばせる可能性はあるのではないかと思います。全体の利用者数は113万、予約件数は60万で同規模の自治体の中ではトップクラスです。

次は図書館事業です。先ほども申し上げた「読書の動機づけ指導」は、動機づけ指導の先生方と図書館職員と学校の先生とが協力して、発達段階を踏まえて小学3年生に指導しています。各クラスに30冊の図書をプレゼントするのですが、それに先立ち「読みたいなあ」と思わせる大変面白い紹介をしています。とても大事な事業です。

学校連携は、学校の色々な事業、例えばセカンドスクールでまちのことをクラスで調べようというオーダーがあった場合などに、図書館で資料をまとめて学校にお送りするなどしています。

「子ども図書館文芸賞」は、最初は読書感想文で始まりましたが、最近は小説や詩の創作部門や読書をした所で絵を画いてもらう、あるいは服や帯をデザインしてもらうような幅広い展開になっています。その他児童サービスや文庫活動助成があり、障害者サービスについては先ほど朗読奉仕の会をご紹介しましたが、録音図書の貸出などの取り組みを行っています。

最後が近隣図書館との比較です。

蔵書冊数		貸出数	
自治体名	(千冊)	自治体名	(千冊)
1 長浜市	987	1 武蔵野市	2,448
2 東近江市	952	2 多摩市	1,719
3 成田市	945	3 箕面市	1,613
4 武蔵野市	881	4 中央区(東京都)	1,590
5 刈谷市	863	5 稲沢市	1,558

貸出可能数		資料費	
自治体名	(千冊)	自治体名	(万円)
1 武蔵野市	603,909	1 一関市	10,561
2 多摩市	480,790	2 成田市	9,662
3 中央区(東京都)	443,758	3 武蔵野市	9,249
4 箕面市	322,615	4 北見市	6,515
5 河内長野市	178,932	5 中央区(東京都)	6,324

武蔵野市の図書館行政についてざっと説明してまいりましたが、今日のフォーラムにあたって、皆さまのご意見に期待することを何点か申し上げたいと思います。

ひとつは、岡本さんから話がありましたが、交流・創造という面です。学校の指導要領や学びの変化もあり、プレイスの地下2階の子どもたちの様子などを見ていると、人によっては大学でのラーニング・コモンズのように、本を借りて読むだけでなく、友達と話し合ったり館からサポートを受けたりしています。こういった機能やサービスのあり方について、いまはプレイスだけですが、あとの2館についてもそういった機能整備への期待があるのかどうか。

次に、人生100年時代と言われていますが、図書館には定年後の男性の利用者も多いです。今後、団塊ジュニアの世代の方が地域に出てこられるようになりますが、図書館としてどのように受け入れていくか。朝からずっと本を読んで帰っていただく、それでご本人がハッピーなら良いとは思いますが、例えば図書館のいろいろな事業、あるいは図書館の運営への参加を通じたコミュニティの形成など、何かしら図書館が果たせる役割があるのかどうか。

また、図書館への基本的な期待として、図書の貸し出し、特に話題の新刊を早く読みたいというのがあると思いますが、新刊本を何冊ぐらい買うのかは図書館行政としてはやはり非常に大きなテーマです。そのあたりについての期待や考え方など。

あと、先ほどご紹介しましたが、いまは3館で閉館時間がバラバラですがそれについての考え方、そして今後10年間の図書館の姿を踏まえた館運営の考え方。いまは吉祥寺図書館と武蔵野プレイスは、武蔵野市の出資団体である武蔵野生涯学習振興事業団が指定管理をしています。

一方で、中央図書館は直営です。今後の武蔵野市の図書館の有り様が定まってきたとしたらそこについて考えていく必要があるかもしれません。

以上についてのご議論などを期待しております。

【船崎】

ありがとうございました。それでは今のお話も踏まえて、10年後の図書館の役割、あるいは将来像というものについてパネリストの皆さんにお話をいただきたいと思います。まずトップバッターとして松山委員。

【松山】

第1部のお話にもありましたが、10年後の予測は本当に難しい。10年前にインターネットがどのように使われていたか思い起こしてみると、ブログが一部で流行しはじめていましたが、各種SNSはまだ無かったように記憶しています。携帯電話は2つ折りが主流でした。これらのことを考えると、テクノロジーや経済は今後何が起きるか、今から予測するのは難しいと思います。

一方で、社会が変わっても人間は人間で、情報を欲する生き物のままです。情報機器が変化しても指の大きさが変化したり思考速度が今の何十倍にもなったりするわけではないし、情報の入手手段や情報の種類・質・量が変わっても、人の生き様や考え方という部分は意外と変わらないのではないのでしょうか。

それを踏まえて図書館の役割を考えると、「変質」ではなく「拡大」ではないかなと思います。図書館関係の仕事をしていると、「紙の本はなくなって電子になるんじゃない？」とか、「図書館なんか無くなるよ」と言われることがありますが、議論はそう単純なものではありません。図書館には戦後すぐから今まで何十年も蓄積されてきた知的財産があります。今後はその基盤の上に新たなものを積み上げていくことになっていくのではないのでしょうか。

そういう意味では、先ほどの岡本委員の資料にあった「10年後の図書館を考える」の最初の4つ（収集・整理・提供・保存）はずっと以前から図書館の基本的な機能で、この4つなしに、そこから先の「交流」「創造」は生まれないようにも思います。この財産を踏まえた上で、人々が集う場や交流する空間、あるいは図書館に来なくても図書館の様々な情報がインターネットで利用できるなどの機能が広がっていくのではないかと思います。

【船崎】

ありがとうございました。次は桂委員、お願いいたします。

【桂】

10年後の予測はなかなか難しく、社会に対応して変化したり拡大したりすることも大切です。一方で10年後も武蔵野市がブレないでほしいと思うものもあります。それが今日の私の話のポイントにしようと思っている点で、武蔵野が以前から実施している子ども向け事業です。

まず、「読書の動機づけ指導」ですが、これは昭和42年から実施されているもので、私は10年間武蔵野市の図書館に関わってきましたが恥ずかしながら最近注目したというか、他の図書

館の事例を見たり勉強したりしていく中で、再び戻ってきたという感じです。他にない特徴であり、今後ともブレずに継続してほしいと思っています。誰もがとおる小学3年生という時期に、年間のきちんとしたプログラムのもと、市立図書館と小学校、子どもの本の専門家が連携して市内12校すべてを回って毎年必ず30冊各クラスに紹介する。1年間かけて子どもたちは1冊ずつ手に取って読むという、この素晴らしいプログラムが50年続いていることに非常に感動しています。もしかしたら今日いらしている方の中にも、この指導を受けた方がいらっしゃるかもしれません。

この事業はすごく大事であり歴史的にも意義のある取り組みなので、どうして他に伝播してないのかとも思います。私は京都ですが、こういった取り組みをしている自治体はありません。かなり予算が必要なので他では難しいとも聞きますが、全く同じやり方でなくてもいいので、武蔵野方式として広めていけたらよいと思います。武蔵野市の市民の皆さんや司書、先生方は当たり前のこととおっしゃいますが、他から見たらかなり稀有なことですし、他の図書館や自治体に向けて自信を持って伝えていく、基本計画を立てるにあたって、武蔵野はコレじゃないかと思っている点です。

もうひとつポイントと思っているのが「子ども図書館文芸賞」で、最近内容をリニューアルしたと伺っていますが、これまたとても良い取り組みだと思っています。なぜなら、先ほどの岡本さんの基調講演に図書館の機能として「交流」「創造」の紹介がありましたように私はこれからの図書館は「表現」ができる場になることを目指していけるのではないかと思っているからです。本を読むだけではない図書館、子どもたちが自分で何かを表現していくきっかけとなる図書館になっていければと思います。

【船崎】

ありがとうございました。読書の動機づけ指導の話が出ましたが、私も図書館におりましていぶん前からやっている事業です。学校の先生と児童文学の先生と図書館の三者が事前に何度も会合して本を選んで読書指導をするというもので、新たに赴任されてきた担当の先生の中には、武蔵野市には読書指導があるので転勤できたらぜひやってみたい、と手を上げて来られたという先生も2、3いらしたくらい、外からも注目されている事業のようです。

ただ、見学や視察にはたくさんいらっしゃるのですが、他ではなかなか実施できないと聞いています。これをぜひ時代に合わせて変えながらも続けていければと思います。

それでは北本さん、お願いいたします。

【北本】

桂さんが子ども向けの話がされたので、私は高齢者をテーマにお話したいと思います。岡本さんの話にもありましたように、超高齢化社会を迎えて高齢層の人口が増えてきます。いま、武蔵野市では65歳以上の人が2割を超えたぐらいだったかと思いますが、10年後はもっとその比率が上がります。

私はずっと仕事をしてきて、地元のことについて退職してから初めて知ることが沢山ありました。仕事をしている人の多くは日々忙しすぎて、また休日は他にやらなければいけないことがあります。地元のことは本当に一生懸命知ろうとしない限り、情報を得ることは難しいと

思います。それで、いざ定年等で仕事を辞めると、実は家の周りのこともあまりよく知らなかったというのは、多くの人に当てはまることではないでしょうか。

武蔵野市は、定年退職した人を対象に「お父さんお帰りなさいパーティ」という事業をされていますが、これを図書館にあてはめて「お父さんお帰りなさい図書館」みたいな形で、図書館はこんなところですよ、こんなサービスがありますといったことを伝えられれば、活用しやすくなるんじゃないかと考えています。

図書館は“安心できる場”という印象があります。それは、無料で人々に本を貸して“知る権利”をちゃんと守ろうというところから生まれてきていると思います。そういう場がコミュニティの拠点となって人々が交流できる、興味があることをどんどん聞きに行き知識を深めて、自分もそういう道に入っていけるきっかけをつくってくれる。これは、年を取って体力が落ちたり、若い頃より世間のことを知る機会が減ってくるなかで、すごく大事なポイントではないかと思っています。

全国の図書館の中には、遅い時間からジャズライブをやっているところや、例えば様々な場所を旅してきた人が訪問地を紹介したり、いろいろな道のプロの方が話をしたりする場を設けているところが幾つかあると知りました。こういった人々が集う場として図書館はすごく良い場所ではないかと思っています。

本を貸してもらって読んで返すというところから、読まなくても何か情報をもたらえる、それが自分の生活を活性化するというような場になっていくと、どんどん地元が楽しくなっていくんじゃないかと思っています。

【船崎】

ありがとうございました。それでは次に岡本さん、先ほど将来像についてお話いただきましたが、補足あるいは他のパネリストの意見に対して何かございましたらよろしくお願ひいたします。

【岡本】

教育長のお話にもありましたように、現在中央図書館は直営で、プレイスと吉祥寺図書館は市関連の財団による指定管理で運営されています。

武蔵野市は、今後10年、20年は人口が減らないと予測されており、日本の自治体の中ではかなり恵まれた状況にあります。ですから紀の川市のようなケースになることは想定しにくい。ただ、大規模災害が起きたらどうなるか。そう考えると、今は大丈夫だから今までのやり方でいいか、常に問い返す必要があるのではないかと思います。

そういった中で、これは理想ですが、図書館の管理運営にもっと市民の方が参加する道を切り拓けないかと思っています。市民も経営責任を追う。海外では図書館委員会＝ライブラリー・ボードという行政組織があり、その委員に市民が任命され自治体職員もそこに入ります。教育委員会と同じように委員を任命して、委員が税金をどれだけ使うのかなど図書館経営に責任を負います。有名なケースはニューヨークの公共図書館ですが、寄付金を集めて運営資金を生み出しています。

このような“市民営図書館”というのが、武蔵野市なら成り立ち得るのではないかという気

がしています。ぜひ市民の方々も声を上げて挑戦すると良いんじゃないでしょうか。

こういう大きな変化は余裕があるうちにやらなければいけない。火が付いた状態になってからだと止むに止まれない政策になってしまう。武蔵野市も10年、20年ならともかく、50年先などの長い目で見れば、相当な高齢社会になって、今と同じ感覚で税金を使って公共施設を維持管理していくのは難しくなると思います。ですから今のうちから50年先を見越して市民が運営や経営に責任を持つ、つまり市民も寄付を募ったりお金をつくったりすることに努力する仕組みづくりをしていくのが良いんじゃないかと思います。

残念ながら日本の図書館ではまだこういうケースはありません。武蔵野市もいまは、市民の書齋であり広場だからこそ役所にお任せするという形が望まれているとは思いますが、この土地柄だからこそ、私はすごく期待したいと思います。かつて自由民権活動の拠点だった土地ですから、誰かが何かをしてくれると依存するのではなく、市民生活の基盤を自分たちで運営していくという気概をもって良いんじゃないかと思います。

【船崎】

ありがとうございました。市民営図書館、図書館経営に市民参加、武蔵野ならではの期待ということで非常に興味深い点が出ましたが教育長、ご感想は？

【竹内】

非常に大胆なご提案でびっくりもしましたが、武蔵野ならではのというのは、ああそうかも、とも思いました、以前福祉を担当しておりましたが、武蔵野市は福祉においてもボランティアが蓄積してきたものには厚みがあり、実際に今もテンミリオンハウスなどは市民主体で運営されています。

いろいろな専門性のサポートは必要だと思いますが、図書館の市民運営を追求していくというのも今ならできるというはあるかもしれないですね。驚きましたが、言われてみれば可能性は確かにあるかも、とは思いました。

【船崎】

ありがとうございました。

時間の関係で次に移りたいと思います。地域における情報拠点として機能する図書館という面もあるわけですが、提供すべきサービスについてのご意見をいただければと思います。まず松山先生から。

【松山】

自己紹介の時にも申しましたが、子どもの頃感じた「図書館が実は使えるな」という思いを大事にしたいと感じています。最近、ビジネス支援に力を入れたり、特定の利用者の特化したサービスをしたりする図書館が増えてきています。昨年行った図書館に関する市民アンケート調査を見ると、一定の限られた利用者向けのサービスは認知度が低いという結果が出ていました。先ほど出ました動機づけ指導のような事業については、自分の子どもが学校に行っても親御さんはご存じなかったりする。大変もったいない話です。ですから、図書館が行っ

ているサービスについてはもっと広報していくことも大事だと思っています。

また、市民の皆さんが、人生の中で困ったことがあったときにどこに相談に行くか。図書館は、皆さんご存じないかもしれないが、意外と“頼れる”ところです。

例えば、先ほど、地元のことをよく知らないというお話がありました。小学校の社会科では3年生のとき地域について学びますが、どこの自治体でも教育委員会が『わたしたちの〇〇市』という副読本を配ります。あれが非常によくまとまっていて、引っ越してきた大人が読んでも地域の特性や歴史などがよくわかります。もちろん引っ越してくると市の便利帳のような、いわゆる行政そのものについての資料はたくさんいただきますし、市役所の窓口でも教えていただけますが、もうちょっと漠然とした情報ニーズについては図書館を頼ると、レファレンスカウンターというものがあって、やり取りをしていく中で、先ほどの副読本など意外に使える情報が紹介してもらえたりします。こうした機能を無くさないでほしい、広げていってもらえたらという気持ちがあります。

【船崎】

ありがとうございました。今度は桂先生お願いします。

【桂】

先ほどの続きですが、情報が溢れていて自分自身で図書を含め情報を選択しなくてはいけないこの時代に、基となるもののひとつは、幼い時にどんなものを吸収してきたかにあると思います。そしてそれは、デジタルな時代になった今でも、ブックスタートから始まって本を読む、本に触れるというアナログな部分にあるし、これは今後も変わらないのではないかと思います。

読書の動機づけのは素晴らしい取り組みですが、本来はそこで終わるのではなく、これを受けた子たちのその後が大切です。どのように図書を選択しているのか、図書館と付き合っているのか。良い取り組みだからこそ、図書館は、さらに発展的な、その後の読書につながるようなサービスに取り組める余地があるのではと感じています。

図書館に関する市民アンケート調査を見ると、市民の皆さんが求めている今後の図書館像は蔵書を充実させてほしい、本を読むスペースを充実させてほしいといったものであり、結構アナログなものを感じています。武蔵野市は全国平均より読書率が高いという結果も出ていますし、そうであればなおさら、動機づけを受けた皆さんに、もちろんそうでない人もですが、その後どんなふうに読書をしていけば良いのか、どうすれば読書経験を豊かにしていけるか、図書館から“発展的な読書”の投げ掛けをしていくのはどうでしょうか。

つまり、読書のスペシャリストを育成するといったサービスやプログラムを、動機づけの次のステップとして武蔵野市が全国に提案することもできるのではと思います。それは全市民に一律ではなく個別に、あるいは年齢層や職業によって個別なサービスになるかもしれませんが。

もちろん図書館員の皆さん、学校の先生方、様々な世代の方たちと一緒につくっていく必要がありますが、そういったプログラムやサービスがあればと思っています。

【船崎】

ありがとうございます。発展的な読書の投げ掛け、プログラムの作成、それから読書のスペシャリストという非常に興味深いご提案でした。それでは次に北本さん。

【北本】

私はサービスとして2つ考えています。

1つはコミセンとムーバスを連動した本のデリバリーサービスです。私の住んでいる所は駅までの導線に図書館がなくて、疲れているときなどは不便だなと感じることがあります。最近、三鷹駅前の武蔵野芸能劇場や吉祥寺東急 REI ホテルにブックポストができて少し楽になりましたが、さらに、ムーバスを活用するのはどうでしょう。

武蔵野市はコミュニティバスを最初に始めた自治体だと思いますが、例えばムーバスの前に防水ケースみたいな本を置ける場所を設置して、各コミセンに停まった時にそこに本を置いて、予約した人は「本が届きました」という連絡が来たらコミセンで受け取る。

例えば武蔵野市に立地する企業と運搬ケースを共同開発して、全国のコミュニティバスで活用されれば利益にもつながるし、武蔵野市はおもしろいことをやってるねという宣伝にもなるしと、良いことづくめの想像しかしてないんですが、楽しいんじゃないかと思います。

もう1つは、私は司書がどういう専門性をもつ方かは詳しく知りませんが、知識がいっぱいあって色んなアドバイスができて本の知識も自分よりもいっぱいあって、本の分類もされているという方だと想像しています。

せっかくそういう知識のある方が図書館で働いているのにそれが活かされていないのはもったいない。本の楽しみ方を司書さんから教えてもらえる仕組みが図書館でできると、せっかく学ばれてきている司書さんの知財も生かされて、面白いと思います。機械的ではない、もっと付加価値がある、本に関する情報がリアルに与えられるのではないかなと。

この間何かで読んだのですが、フォトリディングという読み方があって、読む目的を明確にして目次をチェックして、自分が知らないことは何なのか把握しながらあまり時間を掛けずに効率的に情報を得ていくというやり方らしいのですが、たとえばそういう手法を司書さんが知っている、図書館の中でちょっと話してくれる、関連の本を紹介してくれる、そういったことがあれば新しい世界が広がるし面白いと思います。

【市民】

武蔵野市の司書さんはおろそかになり過ぎと思う。

【北本】

せっかく勉強されていて色々知識があるならそれを上手く活用できる場やサイクルを考えたら、みんなにも役に立つのではないかと思います。

【船崎】

ありがとうございました。本のデリバリー、それから司書の活用についてお話がありました。特に司書の専門性という話題はよくありますが、岡本さんいかがでございますか。もちろんそ

れ以外のサービスについての話題でも。

【岡本】

先ほどの配送の話はあるのではないかと考えています。皆さん報道で目にしたことがあるかと思いますが、路線バスで荷物を運ぶなど貨客混載が地方で増えているのです。ムーバスはコミュニティバスのはしりですし、健全運営されている数少ないケースです。高齢化に伴って配送は欠かせなくなると考えますので将来を先取りして研究し、上手く配送の仕組みを兼ね備えるのは現実的ではという気がします。

図書館司書の専門性については、なかなか難しいところだと思います。優秀な司書もいれば、そうでもない司書もいるのが現実です。どういう体制が望ましいのか私もわからないところがあります。

図書館司書を専門職として採用し、原則的に図書館以外には異動しない仕組みを取っている自治体もありますが、ここが難しいところで、図書館の仕事しか知らないと世間のニーズについていけないと痛感します。私が住んでいる市の図書館で優秀だと思う方の多くは図書館の専門職ではない人、昨年まで土木系の仕事をしてきた課長といった方のほうが、図書館の仕事も直ぐ理解しポイント押さえていると思うこともあります。一方で、大阪市立図書館も図書館外に大きく異動することはない形で専門職を採用していますが、優秀な方が多くいます。だから単に制度の問題ではない。どういう運用をするかが大きな肝であろうと思います。

その意味では、館長にどういった人を据えるかも重要かもしれません。組織のトップをどう育成していくかという考え方がしっかりあって、それがきちんと実施されている図書館の職員は優秀ですし、それがないと能力云々の次元ではなくなってしまう気がします。

ただ、ひとつ気を付けていただきたいのは、図書館の世界では何となく専門職採用制度が望ましいという風潮がありますが、それを無批判に受け入れないほうがいいと思います。大事なのは、武蔵野市にふさわしいやり方、武蔵野市らしい良さをどうつくるかという点ではないかだと思います。

さて、今後の図書館サービスについて私の考えとしては、武蔵野市民だったこともあるのでその立場からぜひと思いますが、これからの将来を考えて、若い人口を獲得するために図書館がもっと機能すると良いと感じます。

亜細亜大学、成蹊大学、東京女子大学、ICU という学生数の多い4大学、すべてが武蔵野市に立地しているわけではないですが、学生たちの生活は三鷹や吉祥寺が中心です。そういう学生たちが卒業した時に、ぜひこの町を選択するように意識したほうが良いのではないのでしょうか。

これらの大学の学生たちはある意味金の卵であって、この町に住み続けてくれればそれなりに納税できるようになることも間違いなく、また、この町を常に若返らせてくれる。

さらに、この4大学は全国から学生が来ますので、この町に多様性をもたらしてくれます。全国から集まる若者たちが、卒業後もここに住み続けたいくなるような図書館政策が大事かと思っています。

大学を出ると大学の図書館は使えなくなるからすごく不便ですが、それで公共図書館が受け皿になるかと言えば、専門的な本には限界があって、ちょっと難しいものがあります。

大学の図書館、例えばICUの図書館は卒業生ならお金を払えば使い続けられますが、就職し

たら駅の近くに引っ越すことが多いので、ICU まで遠くて行くことができない。それがハードルになります。そこで、例えば武蔵野プレイスに ICU 図書館の本が届いてくれるようになるとすごく便利で、そういうことが実は若者たちをこの町に惹き付ける、住み続けさせるポイントになるのではないかと思います。

人口が減っていくのは仕方がないことですが、減らしすぎないようにすることは大事です。その意味で、毎年春に上京してくるたくさんの若者たちをきちんと確保していくことは重要ではないかと思います。

話が長くなって恐縮ですが、誤解のないようにフォローしておく、人口が減ってきていることをあまりネガティブにとらえ過ぎる必要はないような気もします。150 年前の日本の人口は 3,000 万人ですから、明治維新から今日まででいきなり 1 億人も増えたわけで、一時期があまりに多すぎたという考え方もあります。

人口が減っていくのは世代交代に失敗したからです。私の両親は戦中戦後世代で、250 万人以上の子どもが生まれました。その世代が生んだのが私の世代、1970 年代に生まれた第 2 次ベビーブーム世代で 200 万人です。そして私たちの世代が残した子どもは 100 万人ぐらい。日本の人口減少の最大の問題はここで、僅か 1 世代で人口が半減してしまいました。ここまで減ってしまうともはや取り返しがつかず、どんどん人口が減っていくことになります。

ではなぜそうなったかという、私の世代は就職氷河期で、今なおまともな仕事に就けていない人がたくさんいます。それを社会的に放置したからこうなったわけで、この問題自体はもう解決不能です。

ですが、減っていくこと自体を危険視し過ぎるのではなく、減っていくなら減っていくの社会のあり方をきちんとデザインすれば問題ないのであり、いたずらに恐れる必要はないと付け加えさせていただきます。

【船崎】

ありがとうございました。さて、本日は市民の方と意見を交換したく、先ほど、会場の皆さんへのアンケートで、パネルディスカッションでしてほしい話ということで、ご意見をたくさんいただきました。幾つかのグループに分けると、まず多かったのが、1つの言葉に集約すると「デジタル化」とでも言いましょうか、電子書籍や AI などの話ですね。例を挙げますと、「電子書籍が普及すると図書館が不要にならないか」「必要だとするならその理由は何か」、それから「司書が AI に置き換わる可能性はありますか」という質問もございます。この点について、どうぞご意見を。

【岡本】

AI の話はよく出ますが、AI が私たちの仕事を奪うことはないです。安心していいです。そんなに簡単に SF 小説のようなことは起こりません。

ただ、奪うとしたら AI という次元ではなくて、もっと前段階のところで仕事の転換が起きる可能性はあると思います。例えば役所の仕事であれば、パソコンを使えばもっと作業が早くなるのとか、分厚い資料はタブレットで見れば印刷しないで済むのではなど、まだまだ無駄があると感じます。こういった点が合理化されることによって、もっと早い段階で置き換わって

いく可能性があるかもしれませんが。ただそれにはAIの登場は必要なくて、もっと生産性の高い仕事を考えるという次元の話でしょう。

中長期的には、AIがある程度図書館の機能を肩代わりするとしたら、レファレンスのような機能に関してでしょうか。ただ、根本的に様変わりするほどではないと思います。

図書館で皆さんの調べ事や相談に対応する仕事をレファレンスと言いますが、“調べ事に対応する”というレベルではない質問をクイックレファレンスと言います。例えば「お手洗いはどこですか？」というレベル。そうした簡易なレファレンスはAI化されても不思議ないと思います。GoogleホームのようなAIスピーカーがどんどん登場してきて、いまはまだ機能は不十分ですが、使われれば使われるほど高機能になっていきますから。携帯電話が登場した時のことを考えていただければと思います。30年前に出た頃は大した機能もなく、誰もリアリティを感じていませんでしたが、この20年間で凄まじい進化を遂げ、いまや持っていないことの方が異常となっています。そのように大きく成長する可能性はあると思います。

とにかく、くれぐれも、AIが仕事を奪うみたいな言い方は信じないでください。何々がAIに代替するから危険です、だからこういうスキルを身に付けなきゃいけませんというのは、何かを売りたいための商法と思う程度でよいです。

【船崎】

ありがとうございました。時間がだいぶ迫ってきて申し訳ありませんが、学校図書館との連携というご意見もが幾つかございました。学校図書館と市立図書館がもっと連携してほしい、大学図書館でも借りられる本を借りられるようにならないか、といったお話ですとか、その他に、先ほども出た司書の養成ですとか選書する力をもっと上げてほしいといった話もきております。

時間はまだ大丈夫ですか？それでは会場の方でご意見がある方はぜひどうぞ。

【参加者】

武蔵野市に10年住んで、平成元年に武蔵野市を出て埼玉県日高市に引っ越しました。武蔵野市では子ども文庫活動をしていた関係でいまでも武蔵野市の子ども文庫関係の例会などに来ており、今回のフォーラムの話聞いて伺いました。

日高市は4万人ほどの市ですが、動機づけ指導をきちんと実施しています。そしてとても感激したのは、司書の方々が率先して市民に色んな出会いの場や勉強の場をつくったり、私たちは文庫活動で子どもたちにいわゆるストーリーテリング、お話を届けたりしているのですが、そういう人に声をかけて活動の場を広げたりしていることです。動機づけ指導の際にグリムの『赤ずきん』などを語らせてもらった子どもがとても食いついてきて、その後は小学生全学年全クラスで、司書が中心になって私たちボランティアを活用して、口承文学としての昔話を届けています。

その他にも、子どもたちを引き込んだいろいろな活動ができていますが、一方で高齢者部門はあまり活発ではないので、もし司書がもっとたくさんいたら、もっともっと図書館を中心とした色んな人をつなげる場ができるのではと思っています。

ですから、ぜひとも武蔵野市では司書をきちんと養成していただきたい。今も良いですけど

3館の司書の方々は、意気に燃えた活動をされているようには見えない面もあり、もう少し頑張ってもらいたい。教育委員会には、もっと図書館の仕事やあり方を、司書中心で考えていただきたいと思います。

【船崎】

ありがとうございました。教育長、いかがですか。

【竹内】

専門性という大事なお話であったと思います。実は、市立図書館のスタッフは、司書の資格は結構持っています。指定管理者である生涯学習振興事業団のほうが司書の比率は多かったかと思います。おっしゃったように、その人たちが専門性や日々の業務に対してどのように向き合えるか、環境をどう作るかだと思います。先日も議会で図書館職員の専門性について議論がありましたが、先ほど岡本さんがお話されたように館長の立場、あるいは他の経験を持っている方との協働、多様性の中で様々な能力を発揮できる環境をつくるなどことが大事だと思います。

【船崎】

ありがとうございました。では他にもうおふたりぐらいのご意見を。

【参加者】

今日はありがとうございました。私は皆さんのお話がトータルによくわかる立場にあります。生まれてからずっとここで育ち、図書館にも勤めさせてもらって、今はICUの聴講生をしていますし、生涯学習としても放送大学を3度ほど卒業しました。

岡本さんのおっしゃられていることが総合的なまとめになるかなと思いますが、やはり若い人が来ていないのですよね。おそらく教育長と私は同じ世代だと思いますが、若い人たちの育成は本当に大事だし、つなぎ止めに本当に頑張ってもらいたいと思います。よろしくお願いします。

【船崎】

ありがとうございました。他にございますか？

(会場から挙手なし)

【船崎】

それでは最後にパネリストの方、ひと言ずつどうぞ。

【松山】

前半の岡本さんのお話の中に、基本計画のスローガンのものとして、まだ決定ではありませんが、「ひととまちを知で支える」というのがありました。委員会の中で色々と揉んだ結果出てきた言葉ですが、その“支える”というのが武蔵野市らしいと感じています。

“主役は市民”という決まり文句のように思われるかもしれませんが、ここに越してきて思ったのは、武蔵野の図書館というのは市民の意識の高さのようなものが支えているということです。市民が支える図書館、そして市民を支えている図書館。この支え合う構造を実現できるポテンシャルがきっとこの地域にはあるのではないかと考えていたので、この言葉が出てきた時に腑に落ちる思いでした。この基本計画も、ぜひそれが実現するようなところに落ち着けばと思っています。

【桂】

本日はずっと子どもの読書のことで話をさせていただきましたが、私の専門は、郷土資料や地域資料、地域情報をいかにして図書館サービスに結びつけるかという、地域図書館活動です。

その関係で申し上げますと、先ほどレファレンスという言葉が出ましたが、ただ本を借りて返すだけではなく、何か知りたい、何か調べたい、そして今日も少しお話ししましたが、何か自分で表現してみたい、そのために調べたいという時に非常に使えるのが図書館なのです。

そして、それぞれの利用者の皆さんが何を読みたいか、何をしたいか、何を調べたいか、様々なニーズに応えるためにいるのが図書館員です。デジタル時代となり、何ををもって図書館の専門性と言うか難しくなりつつあります。しかし、図書館が地域のニーズに応える図書や情報を選択していく、利用者の知的探究や表現活動を手伝いサポートしていくという役割は変わらず続いていくと思います。それは、武蔵野市に限らず全ての図書館に言えることではないかと思っています。

【北本】

今日は皆さんと図書館のことを色々考えることができて良かったです。

図書館とは、昔は本を借りるところ、夏休みは勉強をしにところ、静かに真面目に大人しくといった固いイメージがある場所でしたが、今はすごく変わってきていて、人が集まって何かが発信できる場になっています。個人が集まって楽しいことをやっとうと同じベクトルに向いた時、成し遂げられるような場所になってきているように思います。きっと、武蔵野の人たちと一緒に考えながらやっとうと、すごく楽しいことができるのではないかと思います。ありがとうございました。

【岡本】

今日はこれだけの市民の方にお集まりいただきましたが、ここプレイスをはじめ市の施設を使っている方にはぜひ、今進めている図書館基本計画策定に関心を持っていただければと思います。

大事なはこの町に住んでいる人たちが町の未来を自分たちで決めていくことです。行政に要望する、任せるだけでは何も変わらない。自分たちがまちの経営に関わるという意識を持つこと。自分のこととして考えない限り、気が付くと自分たちの望んでいたようなことが全く実現されないことになってしまいます。

ですから、この策定委員会にも足を運んでいただき、案が公開されればぜひ読んでいただきたい。そして、わからないことがあったらそれこそ教育長をはじめ市役所の人に聞いてみてい

ただきたい。そうやって計画をまとめていく過程に皆さんもできる範囲で参画していただけたらうれしく思います。

【竹内】

どうも今日はありがとうございました。いくつか印象に残ったことを申し上げたいと思います。

市の教育委員会は学校教育と生涯学習を所管しており、武蔵野市の場合は、その学校教育と生涯学習が密接です。それで、学校が完全週休2日制になった時に、子どもたちを土曜日にどのように地域で受け止めようかを考え「土曜学校」を始めました。そこで様々な体験活動やスポーツの機会をつくっていますが、ひょっとしたら図書館も生涯学習の分野から学校教育にアプローチできるのではないかと感じました。また、学校の図書館には「図書館サポーター」という人材を配置しておりますが、そこを支える体制なども含めて、図書館など生涯学習が学校とどう連携していくか、大きいことだと思いました。

また、人口が移動する大きい時期は18歳と22歳、つまり大学に入学する時と卒業して就職する時ですが、その時期へのアプローチは確かにあると思いました。改めて教育委員会としてどう受け止められるか考えてみたいと思います。

それから市民の力について、武蔵野市はその土壌もありますし、図書館もどのように市民の力に対して運営を切り開いていけるか。どこまで踏み込めるかという話はあると思いますが、そこには目を向けていかなければいけないと思いました。

【船崎】

ありがとうございました。

時間となりましたので、これにて終了にしたいと思います。会場の皆様も含めたくさんのご意見をいただきました。可能な限り図書館基本計画にも反映していきたいと思います。

また、今年末を目途に中間まとめを作成し、それについてパブリックコメントとして市民の皆さんにもご意見をいただきますので、どうかご期待ください。

それでは、本日は誠にありがとうございました。

(会場拍手)

以上